

埋文

とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2021.6.30

VOL.

155



小竹貝塚出土品（富山市呉羽）
《骨角製櫛》

小竹貝塚から出土した縄文時代の櫛です。かんざしやヘアピンのように、髪をまとめて束ねるような用途に使われたと思われます。現代の櫛は木や竹、金属や樹脂を素材にしていますが、これはニホンジカの角を加工して作られています。

とっておき埋文講座 ● 企画展「見て、知って！とやまヒストリー2021」

● 小竹貝塚の編物復元

埋文あらかると ● 収蔵品の棚卸

Center Flash ● チャレンジ とやまヒストリー2021開催！

● 人のうごき

古写真発掘！ ● 不動堂遺跡（国指定史跡）朝日町不動堂

富山県埋蔵文化財センター

企画展「見て、知って! とやまヒストリー2021」

とっておき埋文講座① ー富山県の旧石器時代から近現代までの歴史を発掘出土品から学ぶー

はじめに

歴史を学ぶ小中学生に歴史への関心を深めてもらえるように、数多くの出土品の中から特徴的なものを選定して展示しました。

今年度は、教科書では紹介しないような出土品を数多く展示しました。「へえ〜っ、知らなかった。そうなんだ。」と感じていただけるように、解説パネルの中に「おどろきポイント」の吹き出しを設けて紹介しています。また、昨年度から富山県の史跡やちょっとマニアな展示品について紹介した時代解説シートも用意しています。号数も今後どんどん増やしていきます。



それでは、各時代の見どころについて簡単に紹介します。富山県にある数多くの遺跡や貴重な出土品の魅力を感じていただければ幸いです。

旧石器時代

県指定有形文化財に指定されている直坂1遺跡(富山市(旧大沢野町))の接合資料、立美遺跡(南砺市(旧福光町))の石器などを展示しました。その立美遺跡で見つかった石器のうち約9割が黒曜石製で、その黒曜石は立美遺跡から約530kmも離れた青森県深浦産です。旧石器人の交易が分かる貴重な出土品です。



縄文時代

縄文土器は草創期を除いた5期の土器を展示しました。早期から順に土器を見ていくと、文様が変化したり、簡素化したりしていることが分かります。

ほかには、平岡遺跡(富山市)から出土した球状耳飾、境A遺跡の大珠・玉類

(レプリカ)も展示しました。縄文人は様々なアクセサリーを作っており、縄文人もおしゃれに気を遣っていたことがうかがえます。また、長山遺跡(富山市(旧八尾町))から展示した土偶には、「おさげ髪」を表現したものがあり、縄文人の髪形を知ることができる全国でも貴重なものです。



弥生時代

展示した弥生土器と縄文土器を比べることで、弥生土器は表面がシンプルで、米を炊く際に熱効率がよい形へと変化していることが分かります。

稲作に関連した道具として、下老子笹川遺跡(高岡市(旧福岡町))から石包丁を、江上A遺跡(上市町)から鋤や鍬、えぶりといった木製品と火を起こすための火切臼や火切杵を展示しました。また、炭化米は同じく江上A遺跡から



出土した当時の米です。



古墳時代

古墳から見つかった副葬品として、加納南古墳群(氷見市)の鉄刀や銅鏡を展示しました。ほかにも、ガラス製で青色のビーズをつなげたネックレスも副葬品として展示しました。

また、この時代の土器は弥生土器から続く土師器に加え、須恵器が登場します。土師器と須恵器を並べて展示したり、パネルで解説したりするなど、違いがはっきり分かるようにしました。



古代

この時期は文字資料が急激に増え、文字に関わる道具も出てきます。墨で木の板に文字を記した木簡、木簡の表面を削るのに用いた小刀(刀子)、丸い形をした「円面硯」と呼ばれる硯などを展示しました。

また、小杉流通業務団地No.16遺跡(射水市(旧小杉町))から出土した印仏を展示しました。印仏は日本版画の始まりとも言われています。



中世

中世になると武士が登場します。武器である兜や刀の鍔、鉄砲(火縄銃)の部品である火鋏や鉛玉を展示しました。

また、貨幣経済の発達とともに大量に輸入された宋銭を展示しました。江上B遺跡(上市町)から出土した「備蓄銭」です。今回、展示してありませんが、大量の宋銭が入った甕や壺も見つかっています。緊急時のために保管していたにもかかわらず、保管場所が分からなくなって使われなかったのかもしれないですね。



近世

近世になり、徳川家康が江戸幕府を開いてからは政治が安定し、庶民の間でも娯楽や嗜好品をたしなむ文化が広まりました。

ここでは、主に庶民の生活に馴染みの深い出土品を多く展示しました。煙管や簪のほか、子供のおもちゃである泥面子です。また、桜町遺跡(小矢部市)から出土した下駄と独楽を展示しました。下駄には、鼻緒を通す穴が3つあいているので、観察してみるといいですね。



近現代

旧県会議事堂跡の瓦や薬瓶、麦酒瓶、戦中の訓練時に使用された実砲などを展示しています。これらの展示品は長い歴史の中では最近のものですが、未来へ伝える大切な文化財です。

さて、今回の近現代の展示の目玉として、安政5年(1858年)に起きた安政の大地震に伴う大鷲崩れと土石流災害、治水と分県について紹介しています。公文書館、県立図書館と連携し、文献や資料をお借りしました。公文書館からは「越中立山大鷲崩れ洪水全図(複写)」と「富山県設置の太政官達(複写)」を、県立図書館からは「地水見聞録」と「杉木家文書」を展示しました。



「越中立山大鷲崩れ洪水全図(複写)」
(富山県公文書館所蔵)

特設コーナー

「君は知っていたか?一地下に眠るとやまの遺跡—」と題して、県内の遺跡の上につくられた施設を紹介しています。今回は、遺跡の上にどんな施設がつけられているかを当ててもらえるようクイズ形式にしました。また、遺跡だったとは知らなかった驚きの場所を投票してもらうなど、楽しみながら学べるように工夫しました。

終わりに

この企画展が、「ふるさと」とやまの歴史(とやまヒストリー)について興味・関心を深める一助になればと願います。ぜひ当センターへお越しください。ご来館をお待ちしています。

(松嶋 隆徳)



小竹貝塚の編物復元

とっておき埋文講座②

はじめに

当センターでは富山市の小竹貝塚出土品を常設展示しています。小竹貝塚は厚さ2mを超えるヤマトシジミ主体の貝層や91体もの埋葬人骨で有名な縄文時代前期の遺跡ですが、低湿地性貝塚という特徴を持つため木や縄など有機物の残存状態も良好です。出土品の中には、ヒノキ科の植物で作られた編物もあります。



小竹貝塚出土編物（遺物番号3192）

編物の縦材はヒノキ科の木の芯の部分、横材はヒノキ科の内樹皮です。縦材は幅4mmに割った木の芯2本を1単位とし、幅1.5mmに裂いた内樹皮の横材で上下を挟んでもじり編みしています。細密で丁寧につくられた編物です。

富山県埋蔵文化財センターボランティアの得能かちよさんは縄文編物の復元に取り組んでこられ、2020年2月に、ご自身で製作した編物を寄贈して下さいました。これをきっかけとして、当センターでも復元にあたることになりました。復元作業の詳細については来館者へ配布している「MAIBUN 小竹貝塚研究プロジェクト」Vol.7～10で報告してきましたが、作業を通していくつかの発見がありましたので、改めてまとめてみたいと思います。



埋文ボランティアの得能かちよさん(左)当センターに来館され、復元した編物についてお話し下さいました。

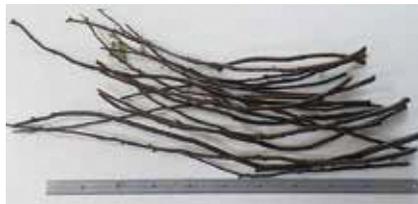
素材の採取時期は、仕上がりを大きく左右する

編物の素材はヒノキの枝です。埼玉県秩父郡長瀬町在住の根岸捷男さん(なかとらもち かつお)のご協力のもと、枝を採取しました。



ヒノキの植樹林(埼玉県秩父郡長瀬町)

春～初夏に枝を伐採すると、切り口が腐って病害虫もつきやすくなります。しかし樹皮を得るためこの時期の枝が必要ですので、建築材にならない木を選び、下の方の枝を数本切り落としました。



ヒノキの枝(2020年4月28日伐採)

長さ52cm～1m20cm、根元の太さ0.8～1.5cmの枝を18本採取しました。

春～初夏の季節、樹木は根から水を盛んに吸い上げて大きく育ちます。木の内部構造をみると、内樹皮の内側に道管という水の通り道ができています。春の木のみ発達した道管が境目となるので、樹皮がきれいに剥がれるのです。春以外の季節の樹皮は芯にしっかりくっついていて簡単には剥がせません。

樹皮は自然素材ですので、四季に応じた植物の成長サイクルの中で、艶や



春採取の枝から樹皮を剥がす

枝の表面を石で軽く叩くと、樹皮の表面が縦に裂けてきます。樹皮の裂け目に沿って指を入れると、簡単に剥くことができます。



剥がした樹皮を指で裂き、水にさらす



樹皮の表皮を竹べらでこそげ落とす

ゴワゴワした表皮の下から白く丈夫な内樹皮が現れます。これが編物の横材になります。

張りといった見た目のほか、厚みやしなやかさ、強靱さといった質も変化しています。どの季節に素材を採取するかということは、製品の質や仕上がりの美しさを大きく左右するのです。

縄文人の高い技術① 条材加工

編み目が整然と並ぶ編物を作るには、条材が良質で太さが均等であることが大前提です。小竹貝塚の編物の縦材は幅4mm弱に細く加工したヒノキの枝の芯です。堅いヒノキをこれだけ細く削り節のないまっすぐな条材に加工するのは、かなり大変な作業です。

磨製石斧でヒノキの枝の加工を試みましたが(下写真)、石斧の刃が鋭利ではないので切るにも割るにも枝の端が



磨製石斧を使って縦材を加工する

樹皮を剥がしたヒノキの芯を、長さ25cm位の扱いやすい長さに切断し(左)、縦に割り裂いて(右)分割材を作ります。

つぶれてしまい、どうしてもボロボロになってしまいます。今回は効率よく作業を進めるため、ノコギリ、ナタ、小刀を使ってしまいましたが、鉄器のない縄文時代、一体どのようにして整った編み材を製作したのでしょうか。

一方、横材は幅1.5mm弱のテープ状に細く裂いた内樹皮です。内樹皮は指で簡単に裂けますが、これ以上細くするとちぎれてしまうギリギリの幅です。これをできる限り長くとります。



編物の縦材(左)と横材(右)。
実際の出土品と見比べながら、素材の寸法や質感が同じになるように作りました。

縄文人の高い技術② 編む

小竹貝塚の編物は断片ですので本来の形は不明ですが、出土品を観察して、中心から渦巻状にもじり編みした円形の編物であると想定しました。このような編物の出土事例はありませんが、縄文土器の外底面に編物圧痕という痕跡が残っていることがあります。それらを参考として復元案を考えました。

まず骨材となる長めの条材3本を組んで中心を固定します。縦材の上下を横材で挟み、1本ごとにもじり編みします。1周したら骨材の間隔が空いている部分に縦の条材を差し込み、編み進めます。縦材は最初1本ですが、隙間ができる度に不規則に増やして2本1組にし、編み目が大きくなってきたら分岐させていきます。これが編み目の細かさを保ったまま、編み物を大きくしていく方法です。

縦材はなぜ2本1組なのか

全国から出土したもじり編みの編物の中でも縦材を2本1組とするのは珍しい事例です。縦材はなぜ2本必要だったのか、その理由は分岐させ編物を大きくしていくためだと考えられます。出土品をみると、分岐は頻繁かつ不規則に現れます。自然な枝の屈曲にあわせた不規則的な分岐が、意外にも美しい編み目をつくりだしているのです。



編む(1)
条材3本を組み合わせて骨材とし、中心を固定します。横材を通して時計回りにもじり編みします(黄色矢印)。編みながら骨材間に縦の条材を差し込んでいきます(赤矢印)。



編む(2)
進行方向(黄色矢印)に向かって右回り(茶色矢印)に横材をねじります。



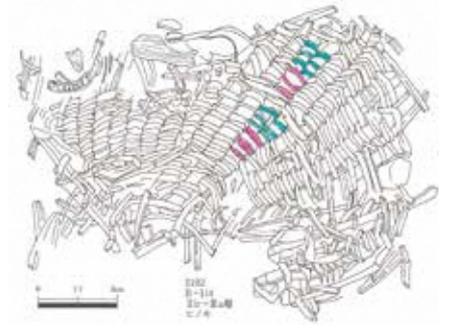
編む(3)
縦材を次々に差し込み、縦の目を増やしながらかみ進めます。縦材はまだ1本です。



編む(4)
縦材間に隙間が空いてきたら、新たな縦材を差し込んで2本1組にします。何周か編み進めたら、2本の縦材を分岐させて編み目を細かくします。分岐させた2本の縦材にはそれぞれ新たな縦材を差し込み、2本1組にします。

製作者は右利き

編物の中心を手前に置き、右手で円周上を時計回りにもじり編みをするとう出土品と同じ編み方になります。この時、横材が左下から右上奥に入るので右利きの人にとって作業しやすい方向



小竹貝塚の編物実測図(遺物番号3192)
横材を色分けして縦材が分岐していく様子を示したものの。赤の1本から青の2本へ縦材が分岐しているのがわかります。



復元品拡大(部分)

です。しかも横材を手前側(円の中心)に向かって締めながら編めるので、固くしっかりとした編み目になります。

製作技法が途絶えた理由

現在、私たちの身の回りにこのような編物はありません。なぜ途絶えてしまったのでしょうか。

現代のザルやカゴは縦横の条材がしっかり組まれた丈夫な構造ですが、小竹貝塚の編物は縦材の大半が中心を通らないため固定が弱く、縦材が脱落しやすい欠点があります。こうした構造上の弱さが後世に残らなかった理由なのかもしれません。

編物の用途は？

編物は軽いため持ち運びには便利ですが、この編物は壊れやすいので海や山へ気軽には持っていきません。また編物は通水性に優れているのであく抜き等の水さらしに用いられることが多いですが、これは目がぎっしりと詰まっているので水さらしにも不向きです。

残るはヒノキが持つ抗菌効果です。食べ物の天日干し、つまり魚の干物や干し貝づくりに使われたのかな…と想像しています。

(朝田 亜紀子)

埋文 あらかると

はじめに

富山県が行政として発掘調査を開始してから、ほぼ50年、当センターが収蔵する出土品は膨大な量になります。縦64cm横40cm深さ10cmの浅箱に換算して約23,000箱もの出土品を建物内の収蔵庫に保管しています。

昭和40年代のほ場整備や昭和と平成の高速自動車国道建設、バブル期の大規模開発に新幹線建設等々、間断なく押し寄せる大規模発掘に、出土品達は報告書の作成が終わるやいなや箱に入れて収蔵庫にしまわれてきました。

各遺跡の箱の収納場所はデータベース化されているのですが、箱の中の詳細な状況までは手が回らずにいたところ、昨年から少しずつ箱の棚卸作業を始めることとなりました。箱を取り出しては写真を撮り、台帳を作成し、今後の保管のために必要な作業を記録します。その作業の中でいくつかの再発見があったので、紹介します。

レトロなガラス瓶

舟橋村の塚越Ⅰ遺跡の箱を取り出したとき、何ともレトロな透明な水色のガラス瓶が目にとまりました。

瓶の肩のところに星のようなマークを中央にしてその両側にアルファベットで「KAGOME BRAND」と陽刻されています。瓶の下にはさらに



ガラス瓶

ガラス瓶の底

収蔵品の棚卸

「AICHITOMATOco」の文字があります。これは、トマトケチャップで有名なあの企業さんに間違いありません。

早速インターネットで調べると、ウスターソースの瓶ということがわかりました。底には「55」の数字があり、1955年製という意味で、約70年前のガラス瓶であることがわかりました。コレクターの方もいらっしゃいます。

かつての調査では、このような近代の遺物は、あまり重要視されていませんでした。何しろ、日々相手にしているのは、千年・万年単位の昔の土器や石器なので、100年ほど前の明治・大正・昭和なんて、つい最近どころか昨日のことにさえ感じていたのです。ところが、時が流れて、明治はもちろん、大正も昭和もどんどん遠ざかっていきます。ついこの前、と思っていたことがどんどん昔のことになり、わからないことが増え、資料的価値が出てきたりするので、

近代の人々の暮らしを物語る証人として、今後はこのような遺物を見直していく必要を感じたのでした。

古代人の失敗

それは、射水市(旧小杉町)の上野遺跡の出土品の中にありました。古墳時代の土器というお酒などの容器として使われていたもので、胴部に穴があり、ここに竹管をさしこんで注ぎ口としました。その壺を手にとると「カラン」と音がします。石でも入っているのかと思ひ、逆さにしても出てきません。出てこないのに、どうやって入れたのかな？ 傾けてどうにか穴から中の物を見ると、丸い焼けた粘土の塊が見えます。でも、細い首からも穴からも入れることも出すこともできない大きさです。不思議



センター内収蔵庫の様子

に思っ、他の職員も交えて考えたところ、この土器を作ったときに、最後の仕上げに穴をあける際、その部分の粘土を取り除くはずが、勢いで中に入ってしまったのだという結論になりました。須恵器作りの工人の、そのときの「あー、やってしまった。」と焦ったであろう場面を想像すると、思わずおかしくなりました。土器の内部にとりこまれた粘土の塊は、笑うようにコロコロと壺の中で転がるのでした。

この土器は「ちょっと残念な遺物」としてメモしておくことにしました。



壺

穴から見える粘土の塊

まだまだ続く棚卸

細々と続けている棚卸は、当分の間続きます。また、ボランティアさんの手を借りて、報告書の図版との照合なども進めています。これから色々な発見が



あることでしょう。この棚卸の成果として「遺物再発見」や「ちょっと残念な遺物」シリーズとして皆さんにお披露目することを計画中です。どうぞ、ご期待ください。

(境 洋子)

夏の催しガイド 2021

Start up

チャレンジ とやまヒストリー 2021 開催!

考古学に触れられるプログラムをたくさん用意しています。
夏休みの課題にもぴったりです。ぜひ埋蔵文化財センターを訪れてみませんか。

① 親子で挑戦 ワクワク体験教室

親子で楽しみながら古代のものづくりにチャレンジします。

対象：小学4～6年生の児童とその保護者

<メニュー>

- ・ 刀鍛冶を体験しよう …… 7月24日(土)、7月27日(火)、
7月29日(木)、7月31日(土)
 - ・ 古代の鏡の鑄造を体験しよう …… 8月3日(火)、8月5日(木)、
8月7日(土)
 - ・ 染物を体験しよう …… 8月10日(火)、8月12日(木)、
8月14日(土)
 - ・ 古代のアジロ編み・漆塗りを体験しよう …… 8月17日(火)、19日(木)
 - ・ ガラスのまが玉づくりを体験しよう …… 8月21日(土)、8月24日(火)、8月26日(木)
 - ・ 大型まが玉づくりを体験しよう …… 8月28日(土)
- (全ての日程で、午前・午後の2回ずつ開催します。事前申込が必要です。)



② こども考古学講座

8月1日(日)、8日(祝)、22日(日)

対象：小学4～6年生

<内容(予定)>

- ・ 考古学って何? ・ 発掘調査ってどんなことをするのか?
 - ・ 県内には、どんな遺跡があるの? ・ 本物の土器をさわろう!
 - ・ 普段は入れない収蔵庫を探検!
- (事前申込が必要です)



③ 夏休み考古体験コーナーまいぶん研究室 7月19日(月)～8月29日(日)

- ・ 校下の遺跡や出土品を調べたり、クイズコーナーを設けたりするなど、楽しく考古体験ができる特設コーナーを開設します。
- (事前申込は不要です)

人のうごき

4月1日付での異動をお知らせします。

■異動 副主幹
主任

青山 裕子
松井 広信

■転出 係長
社会教育主事

高柳 由紀子 (公財) 富山県文化振興財団へ
小嶋 剛 西部教育事務所へ

■転入 副主幹
社会教育主事

金三津 道子 (公財) 富山県文化振興財団から
善徳 甚樹 高岡市立五位中学校から

古写真発掘!—《9》



ふ どうどう 不動堂遺跡（国指定史跡）

昭和48年（1973年）撮影 朝日町不動堂

不動堂遺跡は、県営ほ場整備事業に伴い昭和48年に発掘調査が行われ、調査の結果、縄文時代中期の集落跡であることがわかりました。

写真は、その中でも全国的に知られる大型住居跡の調査風景です。楕円形で、長径が17m、短径が8mにもなります。当時は、日本で最大級として注目を浴びました。下の写真は、その大型住居跡の柱穴を作業員の方が一人一つ掘り上げている風景です。この写真からいかに巨大な住居であるかが分かります。

上の写真からは見渡すかぎり農地の向こうに民家が点在する当時の風景をしのべられます。不動堂遺跡は、調査の後、貴重な遺跡として昭和49年に国指定史跡に指定され、大型住居跡を含む3棟の竪穴住居を復原し、現在は史跡公園として親しまれています。



現在の不動堂遺跡
(左が大型住居)

編集後記

今年もまた暑い季節がやってきます。当センターではこの夏、「チャレンジとやまヒストリー2021」を開催します。夏休みはぜひ当センターにお越しください。ご来館をお待ちしています。
(担当 善徳)

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.155

令和3年6月30日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814
URL <https://www.pref.toyama.jp/3041/miryokukankou/bunka/bunkazai/maibun/index.html>

